

◆連載-Vol.16

現代建築ヤブニラミ

中谷 正人 (建築ジャーナリスト)



執筆者プロフィール

中谷 正人 (なかたに・まさと)
1948 神奈川県生まれ。1971 年千葉大学建築学科卒業、『住宅特集』『新建築』編集長を経て1994 年からフリー編集者。1999 年～2014 年千葉大学客員教授。木の建築フォーラム理事、日本建築学会建築文化事業委員会幹事

戦後の始まり

なかなかわかりにくい平和記念館

現在の平和記念公園の諸施設がどのような順序でできてきたのか、そして丹下がどのようにかかわっていたのか、その経過を調べようとする一筋縄ではいかない。

例えばWikipediaで調べてみるとわかる。建物の名称が変わったり建て替えられているからである。このことを丹下研究室のOBに問い合わせたところ、私の友人の年代でも古いことでよくわからないという返事。

建設時の名称で過程を説明しようとする混雑を招く。そこで、現存するものに関しては現在の名称で記述することに。

まず最初にできたのが、現在は国の重要文化財として指定されている「広島平和記念資料館本館」で、竣工当時は「広島平和会館原爆記念陳列館」と呼ばれていた。

そして1955年には「広島平和記念館資料館東館」が完成するが、竣工当時は「広島平和会館本館」と呼ばれていた。

また、同年に地元の設計事務所によって「広島市公会堂」が建設された。もともと丹下の構想では、ここにも丹下の設計する建物が建つことになっていたが、そうはならなかった。しかし、公会堂の建て替えに際して丹下は同じ敷地に「広島国際会議場」を設計して1989年に竣工。これでようやく丹下が構想した広島平和公園の姿が完成したのである。

中央に軽快な表情を持つ「広島平和記念資料館本館」を置き、ピロティの下を原爆ドームに向かう軸線が通り、両翼に量感を備えた建物を従えた都市空間構成である。

さて、両翼は外観に白い御影が用いられているが、中央の「広島平和記念資料館本館」はコンクリート打放しで構成されていた。水平性を強調しながらも縦のルーバーが軽快な印象を与える。ところが老朽化とともに改修を余儀なくされたところ丹下に会う機会があり、作られた時と同じ方法で再建しませんか、と話したことがあった。

今にしてみれば畏れ多いことであったが、若気の至りである。職人はニッカポッカを穿いてフネでセメントと砂と砂利を捏ね、バケツリレーでコンクリートを運び、竹竿で突いてジャンカをなくす。いずれ多くの建築が乾式工法になると思われるから、いわばコンクリ現代建築においても伝統的なつくり

方を継承してもいいのではないかと、言ったのだ。

すると丹下は、伊勢神宮のようにですか、とってホッホッホと笑い、それで話はおしまいになった。後になって聞いたところ、ちょうどそのころ改修の設計をしていた時期だったという。私の提案をどのように聞いたのかは不明である。

閑話休題。

公共建築か商業建築か

その後、丹下は日比谷にあった「旧東京都庁舎」（1957）、「香川県庁舎」（1958）と矢継ぎ早に公共建築を設計した。いずれも丹下の代表作と言っても過言ではないと思われるのだが、残念ながら「旧東京都庁舎」の跡地には「東京国際フォーラム」が建っている。

旧東京都庁舎の隣に村野藤吾の設計による「読売会館」が同年に竣工している。この2つの建物の評価がいろいろと騒動を起こした。当時、『新建築』の編集を担当していた川添登たちは丹下こそ、言い換えれば公共建築こそ日本のこれからの建築の規範であり、リーダーシップをとるべきだと主張から、村野の読売会館は最上階にホールを持つものの「そごう百貨店」であって商業建築であるために評価しなかった。

それに対し、『新建築』の編集発行人であった初代社長、吉岡保五郎は編集者全員を解雇し、そのことを編集後記で記述した。内容的には、建築のよし悪しは読者の判断に委ねるべきで、その判断を助けるための記事内容にするべきである。メディアという土俵の上で編集者はいわば行司であって、自



平和記念公園より、広島平和記念資料館本館を見る

ら相撲を取ってはいけない、という編集方針が語られ、その編集方針はその後継承されてきた。

その数か月後の編集後記には解雇された4人の編集者が連名で自分たちの趣旨を述べ、再起を誓っている。いずれも正々堂々とした態度だと言わざるを得ない。

今では考えられないかもしれないが『新建築』誌上で社寺仏閣などの伝統建築を採り上げ、地方の建築家たちに投稿せよとの檄を飛ばすなど、現代建築に限らず広い視野から建築を考えようとしていたと思われる。

伝統論争勃発

実はこのころ、「伝統論争」が起こっていた。これからの建築にとって規範とすべきは何かということが重要な課題であった。この問いかけに丹下は弥生文化を例として引き、これに対して白井晟一は縄文文化を例として述べた。

これを遡ること40年、1910年（明治43年）に辰野金吾の仕掛けで、「我国将来の建築様式を如何にすべきや」というテーマで討論会が行われた。明治開国以来、新古典主義が蔓延する中で日本の建築様式をどうするか、という問いかけであり、伝統論争は戦後、これからの日本建築をどのようにするかという問いかけでもあった。

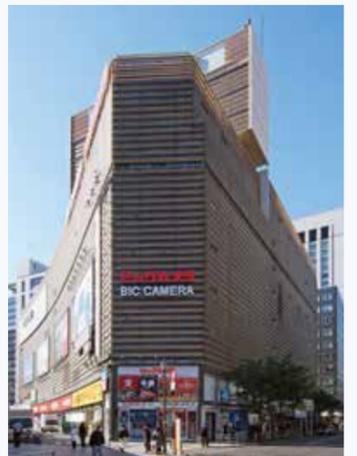
いずれも現代建築が合理主義、機能主義でのみ成立するものではなく、デザイン的要素をどのようにとらえるかという課題である。



旧東京都庁第一庁舎 出典：政治新聞社「首都東京の展望」より



香川県庁舎 東館 出典：ウィキメディア・コモンズ



読売会館 出典：ウィキメディア・コモンズ

つい最近であるが、21_21デザインサイトで開催された「土木展」のトークセッションに参加した。その時のパネラーのひとり、浜松に拠点を置いて頑張っている若手建築家、橋本健史が大学での授業の話をしていて興味を惹かれた。学生に自由に設計せよと言ってもどうしていいかわからない。具体的なものを見せて、これでいいかどうか、どうしたらいいかを考えさせると面白いものが出てくるというのだ。

自由であることは必ずしも自由ではない。場合によっては途方に暮れてしまう。具体的な形を弄り回すことによって新しい形も生まれてくる。過去のものを手本とし修正したり何かを付加したり、あるいは時代の空気を反映させたりして表現してきた。時には天才的なひらめきを持った建築家もいただろう。それが一時の仇花ではなく、広く受け入れられたならば賛同者を呼び、敷衍していったこともあっただろう。それが建築の様式の歴史だった。

どうやら世の中の流れは主義主張では動かないようだ。川添たちが公共建築にリーダーシップを与えようとしたものの、その後の日本の建築デザインの流れは非公共建築が大きな力を持つようになったのは皮肉でもある。

(末筆ながら丹下健三の広島計画については古市徹雄、豊川齊赫両氏に教えを仰いだ。お礼とともに氏名を記しておくが、本文の内容に関してはすべて私の文責である) (続く)